



あすなろ

特別支援教室あすなろ
令和7年 9月 No.4

こんな「困った」ありませんか？

今年度、特別支援教育や特別支援教室で行っている支援について6回シリーズでお知らせしています。日常生活のお子さんとの関わりの中で、お子さん自身が『困った』と感じていること、保護者の方が『困った』と感じていることがあると思います。あすなろだよりを通して、6つのケースを紹介していきます。お子さんとの関わり方のヒントにいただけると幸いです。

それぞれのケースについて、**実態** → **『困った』の背景にあるもの** → **対応、支援** の流れで紹介します。

ケース3 人のいやがることを平気で言ってしまう。

実態

Cくんは、誰にでも話しかけます。「おじさん、どうして髪の毛ないの?」「おばさん、太っているね」など、相手の嫌がることを平気で言ってしまう。

『困った』の背景にあるもの

相手の気持ちが分からない。 → 自分の気持ちを知らない。
自分の言葉で相手はどう思うのかを想像することが難しい。



対応・支援

- ①「いやな気持ち」が分かっているのか確認する。
→相手の気持ちを知るためには、自分の気持ちを知らなければなりません。
(例) 友達におもちゃをとられたときに「(おもちゃを取られて) いやな気持ちになったのだね。」と気持ちを言葉に込めて伝える。
- ②保護者自身が言われていやだったことをていねいに伝える。
(例)「〇〇って言われたら、お母さんはいやだった。そのことはもう言わないでほしい。」
- ③言ってはいけないことを一つのルールとして伝える。
(例)「相手の体のことは言わないこと!」